

炎天寺一茶まつり 全国小中学生俳句大会 50周年記念対談

江戸後期の俳人・小林一茶ゆかりの東京都足立区・真言宗豊山派炎天寺(吉野秀彦住職)で毎年11月23日に開催されている「一茶まつり全国小中学生俳句大会」が、昨年(平成23年)第50回を迎えた。小さな生きものや草木のいのちを慈しんだ一茶の心を受け継いで半世紀。俳句が育む豊かな心とはどのようなものか。元文部大臣・東京大学総長で日本を代表する俳人でもある有馬朗人・国際俳句交流協会会長と吉野住職に対談してもらった。(進行/構成 仏教タイムス編集部)



有馬 一茶まつりのことは新聞などでよく知っています。子ども俳句の草分けですね。

俳句の最大の特徴は自由律を除けば定型があり、しかも「五・七・五」と短いこと。子どもからお年寄りまで誰もができるので、非常に人気がありますね。

この大衆性ゆえに、「俳句は芸術ではない」と低い評価を下す人もいます。しかし、誰でも作れるという裾野の広さは極めて重要です。

もう一つ重要なことは、俳句は、自然と共に生活している人間の気持ちを詠うものだということ。カエルがとび跳ねただけでも句になるんですから。

古池や蛙飛びこむ水の音 **松尾芭蕉**

何も難しいことを考えなくても、題材は日常生活の中にいくらでもあります。トンボ、カエルといった小さな動物や、公園の草花を見て俳句を作る。四季の移り変わりを詠う。これはすばらしいことです。

欧米でも俳句に注目し、小学生に「見たものを自分

の感じたままに表現してごらん」と教えている。英語でもスウェーデン語でも、短い言葉でまとめる訓練として俳句を導入しています。俳句は今、世界で流行っているんですよ。

子どもの句に接し仏性と出会う

吉野 一茶まつりは、「子どもの感性をほめる場所は世の中にいくつあってもいいだろう。子どもにはほめるところがいっぱいあるのだから」という思いから始めたんです。

一茶は炎天寺や六月村(足立区六月)を度々訪れ、

蝉なくや六月村の炎天寺

やせ蛙まけるな一茶是にあり

などの句を残しています。

そこで昭和37年に一茶の句碑を境内に建立して、「子どもたちにも俳句を作ってもらおう」ということになりました。(先々代の堅清住職19年、先代の孟彦住職21年、秀彦住職10年と3世代にわたる)50年間で、約630万句が集まっていき、賞状は18万枚以上手渡しました。毎年、全国の小中学校の児童生徒から10万を超える応募があり、11月23日の一茶まつりで表彰式を執り行います。ここで賞状を受け取った子どもたちは、本当に良い笑顔を見せてくれるんです。

代表的な句を一つご紹介します。

天国はもう秋ですかお父さん

昭和60年に三重県の小学校5年生のお子さんが作った句です。亡くなったお父さんに、語りかけるように詠んでいます。

有馬 これはとってもいい句だね。一茶まつりに寄せられた句だったんですね。

吉野 こんな句にも出会いました。

母の日の母の目ざまし止めておく

お星さまいっしょにこたつ入ろうか

妹の鼻緒ゆるめて七五三

スイカわりスイカがやめてとないている

これらの句を仏さまの目で見えていくと、布施、愛語、利行、同事という菩薩の生き方が内在しています。この50年、私は子どもたちの句に接しながら同時に多

くの仏性に出会ってきた気がするんです。

他に生活の中の身近なものを詠んでいる句には、

すすきの穂帽子にさして騎士となる

星飛んで案山子は闇の兵になる

かくれんぼ息も一緒に隠れてる

などもあります。子どもたちは対象を自分の目の高さで見、いのちを吹き込んでいる。私はそんな感性がとっても好きなんです。

型を覚えるから独創性が出せる

有馬 子どもには自由にやらしたらいいですよ。ただ中学と高校になると下手になってくる。絵画でもそう。小学校の頃は自由に描いていたのに、中学生になると型にはまり始め、高校になると型に縛られてしまう。これは教育の難しさでもある。でも、これはやむを得ない。

室町時代に能楽を大成した世阿弥の言葉にもある通り、幼少の時分には自由に楽しませればよい。好きにやらせることで、その芸を好きになることが一番大事。その次の段階で型を徹底的に教える。そして最後は「型を出て、自分のオリジナルを生み出さなさい」と言う。中高生の頃は、ちょうど型にはまる時期。技巧を教わり始めるとつまらなくなる。しかし、そういう時代を越えなないと人間というものにはならないんですね。

吉野 型を覚えた先の独創性をどう生み出すか。本人の意志が問われますね。

有馬 身に付けた型から抜け出るためには、相当な努力が要る。独創的な人をよく「型破り」って言うけど、しっかりした型があるからこそできる。型がないのはただの自己流です。いつまでも自由にやっていたって伸びない。これが教育の難しいところですね。

吉野 (炎天寺では)毎年夏休みに緑陰子ども俳句教室を開いています。園児から中学生まで集まり、境内で題材を探して自由に俳句を作ります。子どもたちには作句のポイントとして、「“きれいだな”“楽しいな”という言葉が浮かんできたら、もう一つ先の気持ちを考えてごらん」とアドバイスしています。

有馬 それはいいですね。教育というのはそういうところから始まるんだよね。子どもたちは“うれしい”“楽しい”“おいしい”と率直に言う。でもそれだけだと前

に進まない。そこで教育が必要になる。表現方法を教えていかないと。

吉野 一茶まつりで、常に優秀な句を出す小学校が2校あります。その2校が実に対照的なんです。一つは、どの句を見ても俳句の型がきちんとできている。ところが、全部同じ句に見えてきてしまうことがあります。

もう一方は、全員が全然違った句を出してきます。伸び伸びと自由に作っているという雰囲気伝わってきます。



有馬 後者の方が成長しますね、きっと。同じことが高校生生の俳句甲子園でも言えます。ある学校は、論理も表現も実にうまい。でも、あるところまでで、それ以上は行けない。

吉野 しかし、ずっと自由なままでも成長しませんね。

有馬 訓練をしていないからです。たとえば、トンボ好きな少年が毎日トンボを追いかけていても、自然科学者にはなれません。トンボの生態を学び、顕微鏡で研究するなどして自然科学の型を覚えていく。でも、だんだんつまらなくなる。俳句も同じですね(笑)。

吉野 自由に詠むことと型を覚えること、両方がやっぱり大切なんですね。

有馬 日本はどちらかというと、型にはめていく教育の方が得意だよね。だから日本人の大衆的な能力は高いんです。その反面、独創的な人物を輩出しにくい。日本の教育は平均レベルを上げるところから出発し、戦後の日本を成功へと導いた。でもグローバル化が進む現代では、先進的で独創性に富んだ人物が必要になってくる。それがここ 20 年間の日本の課題ですね。

教育の難しいところは、たとえ伸びの遅い子でも丁寧に教えていくとハッと目が覚めて伸びようになることがある。いろんなタイプの子どもがいるから、スローガンで目標を決めて、みんな同じように教育するという方針は良くないですね。

有馬 欧米やイスラム圏の国々と比べてみると、日本には決定的な欠点があります。それは宗教が弱いことです。お坊さんを前にごめんなさい。日本ほど宗教がダメな国はない。宗教を司る人たちが、自分たちのなすべきことをやっていない。

ここ 20 年、私が講演の度に仏教徒の方々をお願いしているのは、お寺で日曜(土曜)学校を開いてほしいということ。ヨーロッパでは各教会がしっかりやっけていて、参加者が少ない所でも 10 人から 50 人は教えている。日本でも教会は結構がんばっている。

一方、非常に多くのお寺があるけれども、その中で日曜学校をやっているところはほとんどありません。以前、ある宗派のお坊さんに随分とそれを言いました。

一番傑作だった返事は、「そんなこと言ったって忙しいんです。お葬式がしょっちゅうあるんですから」。日本のお坊さんはお葬式だけしている。私はそういうイメージが不満なんです。

吉野 先生のお話はとっても耳に痛いんですけども、実は仏教界では子どもを対象にした行事が山ほどあります。

派手にやっているものも、地道になさっているものもたくさんある。その地道なところをきちんと見てほしいです。地域に密着し、いろいろな工夫を凝らして、面白い行事を開催しているお寺も少なくありません。ぜひ子どもだけでなく、その親御さんにも一緒に参加していただきたいと思っています。

有馬 そういう意味では、お寺が幼稚園をやっているのは非常にいいことですね。

お坊さんにはもっと“日常生活を送る上での良い心がけ”とか“生きものをかわいがって、いのちを大切に”とか、いきなり仏さまの話をするのではなく、やさしい言葉で人の道とは何か、子どもたちに話してほしい。

欧米でも宗教が弱くなったと言われていますが、アメリカの田舎町に行くと、まだまだ日曜日には親子連れで教会に行きます。イエス・キリストに祈ることが中心かもしれませんが、教会では人間の生き方も教

わるわけです。そういう習慣が、日本ではだいぶ薄れてしまっている。

吉野 私の一つ上の世代、60 代の方と話す、「子どもの頃にあなたの親(先代の孟彦住職)からいろいろ教わった」という話がいっぱい出てくるんですね。

有馬 昔は今よりも、お寺はずっと身近でしたね。

要するに日本のお坊さんには、もうちょっと社会や家庭で仏さまの生き方が根付くように活動してほしいということです。私の生家は禅宗でしたが、親が仏壇の前で拝んでいる姿を見て、子ども心に随分と影響を受けたものです。

俳句教室で礼儀を教える

吉野 今、私たちから下の 30 代、40 代の世代が、「これじゃいかん！」と発奮し、様々な取り組みを始めています。精進料理のレストランを月に何回か開くとか、写経や坐禅の体験修行の教室を開いたりして、一般の方々にわかりやく仏教を伝える努力をしています。被災地支援活動を震災直後からずっと継続して続けている青年僧侶のグループもあります。

もちろん私たち世代やその上の方々も東奔西走しています。

有馬 ほう。それをもっと広めてほしいね。国がやると政教分離の原則に触れるからね(笑)。お坊さんたちにはもっと、いろんな場所に出向いてほしい。

吉野 先ほど、炎天寺では夏休みに俳句教室を開き、子どもたちに俳句を教えていると申し上げましたが、実際は俳句半分、礼儀作法や約束を守ることを教えるのが半分でしょうか。

俳句は題材をよく見て作るものですから、お手伝いに来てくださっているおばあちゃんたちが子どもに寄り添って、じっと小さな生きものや草花を見ている。そこに自分と変わらぬいのちがあることを発見できる子が多いんです。観察の観は観音さまの観なんですね。目の前にある題材を慈しんでいます。

有馬 ですから、子どもの時に、お寺に行って俳句を作るというのは最高の教育だ。俳句を通し、小さな動物や植物のいのちを大切にしなければならないことがわかるからです。

「いのちの尊さ」を、学校も社会も親も教えなくなった。いじめ自殺という痛ましい事件の根は、まさにそこにあると思う。

私は別に「神仏の前に行って、みんなで拝め」って言っているわけじゃないんです。子どもの時分に、人間の生き方をやさしい言葉で教えてくれる存在が必要だということなんです。これはもう大人になってから聞いたって、身に沁みないですよ。子どもの頃に聞いたことは、その人の一生に大きな影響を与えます。宗教教育というのは、元来そういうものではないですか。

吉野 この俳句教室では、もし悪ふざけが過ぎているなど感じたら、私が雷を落とします。子ども同士がワイワイガヤガヤやるのはいいんです。しかし時として、静かに人の話を聞くところ、お友だちの意見を聞くところでも、そのガヤガヤが止まらない。そこで雷を落とすんです。雷には小さいの、並みの、特大のって3段階あるんですが、友だちが嫌がっていることをする時には特大を落とします。いい悪いを教えるのは大人だし、ここまでは許容範囲というさじ加減も怒られなければ覚えることができないかもしれません。

俳句教室の最後にはカルピスが出るんですが、子どもたちは配ったり後片付けをしたり、よく手伝ってくれます。そして「いただきます、ごちそうさま」のあいさつも自然に音頭を取る子が出てきてまとまります。子どもたちは実に吸収が早い。だからこそ、心して接さなければいけないでしょうね。

有馬 お寺に行けば、いろんなことを教えてもらえる。ちょっと宿題もやれるとか(笑)。私は、江戸時代の寺子屋のようになればいいなと思っているんですよ。お坊さんには、お寺の可能性にもっと気づいてほしいですね。

法話・葬儀・戒名— 仏教をわかりやすく

吉野 (炎天寺の)先代住職が亡くなって今年で11年目ですが、それまで30年、毎月法話の会をしていました。車座になって、自由に話し合ったりしていました。

有馬 それですよ！そういうことを、どんどんおやりになるといい。

それともう一つ、葬儀のことで注文を付けてもいいですか。キリスト教のお通夜の良いところは、牧師さんが故人との関係を話しながら、その人の一生を振り返ることです。日本のお葬式では故人の友人が弔辞で話しますが、お坊さんも「この方はお寺とこういう関係があって…」と話をなさるといいですね。



吉野 うちのお檀家に葬儀社の方がいますが、「今のお坊さんは葬式が終わっても何もしゃべらない人がいる。法話をしてくれるとありがたいんだよ」と言います。僧侶はこうした声に謙虚に耳を傾け、仏さまの教えを伝えるという役目を忘れてはいけませんね。

有馬 それから戒名。普通の人にはよく意味がわからないですよ。

吉野 私の場合、故人の人柄や生きざまを遺族から教えていただき、私が存じ上げていることも含めて、その方に合ったお戒名を付けさせていただきます。

子どもが生まれた時、親は「幸多かれ」と願って名前を付けるわけですが、僧侶もそれと同じように仏の世界に往っても「幸多かれ」と祈って戒名を付けます。人生の先輩に、「今まで素晴らしい生き方の見本を見せてくださってありがとうございます」という感謝の思いを込めています。

有馬 ぜひそういうことを、社会の人々にわかりやく伝えていくといいですね。お坊さんの活躍に期待しています。

【対談者略歴】

ありま・あきと／昭和5年9月生まれ。第125代文部大臣(小淵内閣)、第58代科学技術庁長官(同)。第24代東京大学総長、理学博士。現在は武蔵学園長など教育界の要職を務める一方、国際俳句交流協会会長として世界各国を回り、俳句文化の普及に尽力している。

よしの・しゅうげん／昭和34年4月生まれ。真言宗豊山派光明編集委員。布教研究所研究員。自坊、炎天寺で様々な句会を開催。俳句を通じた地域振興に取り組んでいる。